

ハワイ移民の生活用具

周防大島町文化財保護審議会委員 中野 行真

明治18年、労働力不足に悩むハワイ王国から農業移民を依頼され、第1回官約移民が実施されると、明治27年の第26回までの9年間で29069人の日本人が海を渡った。そのうちの4000人が大島郡出身者であった。その後、アメリカ本土へも移民ができるようになる、ハワイからアメリカ本土に渡る人、直接日本から渡航する人も出て、大正5年の時点でハワイに3912人、アメリカ本土に1036人が大島から移住していた。そうした移民の中には、契約終了後に帰国して故郷へ家を建てたり、海外から大島の学校や社寺に寄付を行い故郷の発展に協力した人もいた。

西屋代上片山の日本ハワイ移民資料館は、そうした移民者のひとりであった福元長右衛門が大正14年に帰国した後、建てた住宅である。館内にはハワイ移民や出稼ぎに赴いた人々が使用した民具類や、また福元長右衛門が帰国後にアメリカでの生活をしのびながら使用した民具類が収められている。

ハワイに赴いた人々は、その多くがサトウキビ栽培に関する農業移民で

あった。館内に展示されているケーンナイフは、サトウキビの収穫の際に用いたものである。人々は着物やそろばん、子どもの教育用の教科書を始めたさまざまな物品を日本から取り寄せて使用したほか、現地の物品を用いて日々の生活を送っていた。資料館入り口に展示されている木臼もそうしたものの一つである。臼はハワイに生えるオヒアの木で作られたもので、ときに日本を懐かしみながら餅をつくのに使用したものである。

次第に日本人移民が増えていくなか、現地でも醤油や日本酒の製造が始まる一方で、ハワイの生活スタイルになじむ人々もいた。オーブンや洋式食器を用いてワッフルやホットケーキを焼き、アイスクリームを食べ、ときにはピアノに親しむといった生活である。資料館には福元長右衛門が帰国の際に持ち帰ったそのような器具も展示してある。



◀オヒアで製作された木臼（日本ハワイ移民資料館オープン時にハワイ島ヒロ市の浄土宗明照院より寄贈）



▶ワッフル焼き器

人権擁護委員の活動紹介 (人権の花)

人権擁護委員は、「人権の花」運動を推進しています。

「人権の花」運動は、小学生が花を育てることにより、命の大切さや思いやりなど、基本的な人権を尊重する精神を育むことを目的として行われている運動です。

今年度は、東和小学校に「人権の花」としてヒマワリやマリーゴールドを贈呈し、大切に育てられています。

福社課 民生福祉班

☎0820(77)5505



▲「人権の花」贈呈式の様子（東和小学校）